

【 復活のトロパリ 第1調 】

きゆ うせ え いしゆよ、 イウ デ ヤ の ひ と は か を  
 救 世 主 人 墓  
 ふ うじ て 、 へ い そ つ なんぢ の い さ ぎ よ き み を  
 封 兵 卒 爾 潔 軀  
 ま も る と き 、 なんぢ は み っ か め に ふ く か つ  
 守 時 爾 三 日 目 復 活  
 し て 、 せ か い に い の ち を た ま え り 。  
 世 界 生 命 賜  
 ゆ え に て ん ぐ ん は なんぢ い の ち を ほ ど こ す の  
 故 天 軍 爾 生 命 施  
 しゆ に よ べ り 、 ハ リ ス ト ス よ 、 こ う え い は  
 主 呼 り 光 榮  
 なんぢ の ふ く か つ に き し 、 こ お う え い は なんぢ  
 爾 復 活 歸 し 光 榮 爾  
 の く に に き す 、 ひ と り ひ と を い つ く し む  
 國 歸 獨 人 慈  
 しゆ よ 、 こ う え い は なんぢ の お も ん ぱ か り に  
 主 光 榮 爾 慮  
 き す 。  
 歸

【 克肖女マリヤのトロパリ 第8調 】

は は よ、 なんぢの うちにかみのぞうによるもの  
 母 爾 内 神 像 由 者  
 は た し か に す く わ れ た り 。 け だ し なんぢは  
 確 救 蓋 爾  
 じゅ う じ か を と り て ハ リ ス ト ス に し た が い、 す ぎ  
 十 字 架 執 従 が い、 す ぎ  
 や す き か ら だ を か ろ ん じ、 ふ し の も の た る  
 易 體 輕 不 死 者  
 た ま し い の た め に お も ん ぱ か る こ と を お こ な い  
 靈 爲 慮 行  
 を も っ て お し え た り 。 ゆ え に こ く し ょ う な る  
 以 教 故 克 肖  
 マ リ ヤ よ、 なんぢの しん は し ょ て ん し と と も に よ  
 爾 神 諸 天 使 偕 喜  
 ろ こ び た も お う。  
 給

【 克肖女マリヤのコンダク 第3調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き い  
 光 榮 父 子 と 聖 神 に き い  
 い す、  
 さ き に い ん こ う に ふ け り た る も の は い ま は つ  
 先 淫 行 耽 者 今 痛

う か い に よ り てハリストスのよめとあらわれ、  
 悔 由 聘 女 現

てんし の ど せい に な ら い て 、じゅうじかのぶき  
 天 度 生 効 十 字 架 武 器

を も っ て あつきをほろぼおす。ゆえに  
 以 惡 鬼 滅 故

し え い な る マ リ ヤ よ 、なんぢはてんのくにの  
 至 榮 爾 天 國

よめとあらわれたあり。  
 聘 女 現

【 復活のコンダク 第1調 】

い ま も い つ も よ よ に 、ア  
 今 何 時 世 世

ミ ン。

しゅさいよ、なんぢはかみなるによりてこう  
 主 宰 爾 神 因 光

えいのうちに はかよりふくかつし、せせ  
 榮 中 墓 復 活 世

か い を も と も に ふ く かつ せ し め た ま え り 。  
 界 借 復 活 給

ひ の の せ い は なんぢ を か み と し て ほ め う  
 人 性 爾 神 讚 歌

た い 、 し は ほ ろ ぼ さ れ 、 ア ダ ム は た の し  
死 滅 樂

み 、 エ ヴ ア は い ま な わ め よ り と か れ て  
今 縛 釋

よ ろ こ び て よ ぶ 、 ハ リ ス ト ス よ 、 な ん ぢ は  
觀 呼 爾

し ゅ う じ ん に ふ く か つ を た も う し ゅ な り 。  
衆 人 復 活 賜 主

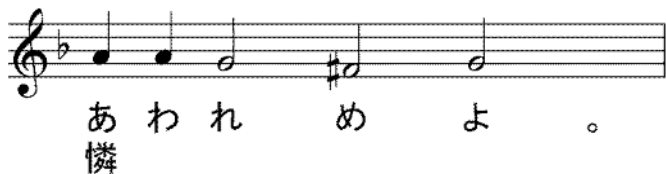
司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と  
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいためつうかい  
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
たわれらいやふとうなんぢしよぼくこときおいなんぢせい  
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
さいだんこうえいまえたなんぢとうぜんふくはいさんえいたてまつたもの  
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と  
しゅさいなんぢみづかわれらざいにんくちせいさんうたうなんぢじんじ  
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ  
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
せいわれらしょうがいぜんこうもつなんぢつとえたませい  
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
しょうしんぢよこせいなんぢよろこびなしよせいじんきとうよ  
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
 じょうせいのものよ、われらをあわれめ  
 常 生 者 我 等 憐  
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
 なるじょうせいのものよ、われらをあわれ  
 常 生 者 我 等 憐  
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 聖 神 聖 勇 毅  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん  
 光 榮 父 子 聖 神  
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
 歸 今 何 時 世 世  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
 聖 神 聖 勇  
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 毅 聖 常 生 者 我 等



司祭) ( 黙誦：<sup>しゅ な よ き もの あが ほ</sup>主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、<sup>ぎ もの なんぢ そのくに</sup>ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
<sup>こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ</sup>の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 )

【 提綱 (プロキメン) 主日第1調 及び克肖女の第4調 】

司祭) <sup>つつし き しゅうじん へいあん</sup> 慎みて聽くべし、衆人に平安、

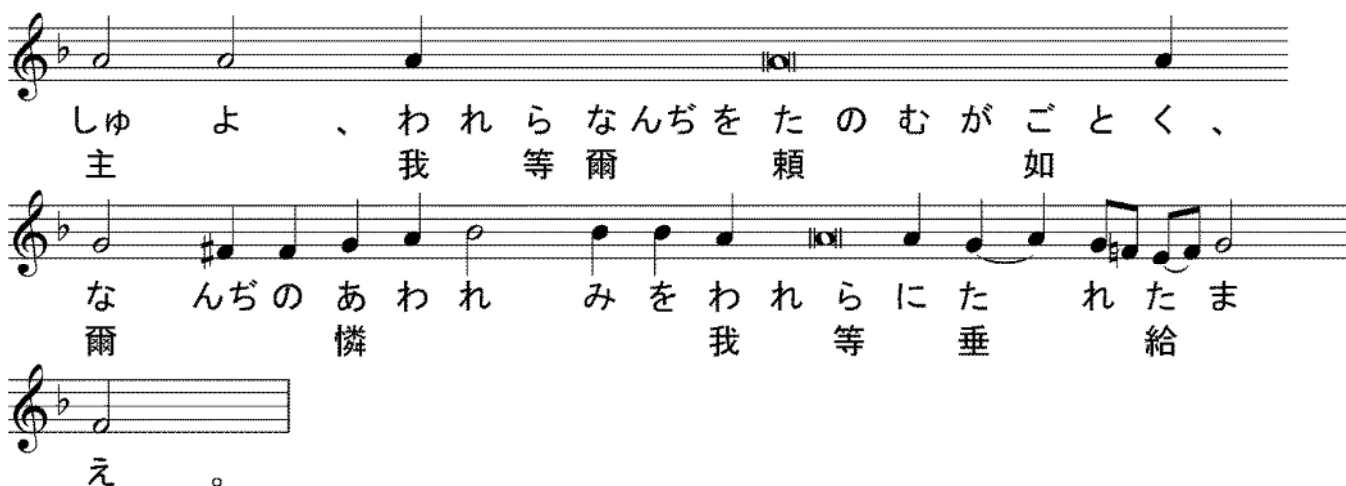
誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>しゅ われらなんぢ たの ごと なんぢ あわれみ われら た たま</sup> プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給え、



誦經) <sup>ぎじん しゅ ため よろこ さんえい ぎしゃ かな</sup> 義人よ、主の爲に喜べ、讚榮するは義者に適う、



誦經) <sup>かみ なんぢ なんぢ せいしょ おい おごそか</sup> 神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり、



【 使徒經 (アポストロス) 321 半端 エウレイ書 9 章 11 節~14 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup> 聖使徒パヴェルが <sup>じん たつ</sup> エウレイ人 <sup>しょ よみ</sup> に達する書の讀、

司祭) <sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup> 兄弟よ、<sup>しょうらい</sup> ハリストス、<sup>ふく</sup> 將來の福の <sup>しさいちよう</sup> 司祭長 <sup>きた</sup> は來りて、<sup>さら おおい</sup> 更に大に、<sup>さら ぜんび</sup> 更に全備なる幕、  
 て <sup>つく</sup> 手の造る <sup>ところ</sup> 所に <sup>あら</sup> 非ず、<sup>すなわち</sup> 即 <sup>そのぞうしき</sup> 其造式に <sup>あら</sup> 非る者に <sup>もの</sup> 縁りて、<sup>おやぎ</sup> 牡山羊と <sup>わかきおうし</sup> 牡犢 <sup>ち</sup> との血を以て  
 するに <sup>あら</sup> 非ず、<sup>すなわち</sup> 乃 <sup>おのれ</sup> 己の血を以て、<sup>ち</sup> 一次 <sup>ひとたび</sup> 聖所に入りて、<sup>せいしょ</sup> 永遠の <sup>い</sup> 贖 <sup>えい</sup> を獲たり。<sup>あがない</sup> 蓋若 <sup>え</sup> しく <sup>けだしも</sup> 肉體  
<sup>おうし</sup> し牡牛と <sup>おやぎ</sup> 牡山羊との血、<sup>ち</sup> 及び <sup>およ</sup> 牝 <sup>わかきめうし</sup> 犢の灰は、<sup>はい</sup> 穢れたる者に <sup>けが</sup> 灑がれて、<sup>もの</sup> 之を <sup>そそ</sup> 聖にし、<sup>これ</sup> 肉體 <sup>せい</sup> に <sup>にくたい</sup> 潔淨 <sup>にくたい</sup> を致さば、<sup>けつじよう</sup> 況 <sup>いた</sup> や <sup>いわん</sup> 聖神 <sup>せいしん</sup> に由りて、<sup>よ</sup> 瑕なくして、<sup>きず</sup> 己 <sup>おのれ</sup> を神に <sup>かみ</sup> 獻げし <sup>ささ</sup> ハリストスの <sup>ち</sup> 血は、  
<sup>われら</sup> 我等の <sup>りようしん</sup> 良心 <sup>し</sup> を死の <sup>し</sup> 行 <sup>おこない</sup> より <sup>きよ</sup> 潔めて、<sup>い</sup> 活ける <sup>まこと</sup> 眞の神 <sup>かみ</sup> に <sup>ほうじ</sup> 奉事せしむるをや。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) キリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり、かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。もし、やぎや雄牛の血や雌牛の灰が、汚れた人たちの上にまきかけられて、肉体をきよめ聖別するとすれば、永遠の聖霊によって、ご自身を傷なき者として神にささげられたキリストの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて死んだわざを取り除き、生ける神に仕える者としないうか。

\*\*\*\*\*

【 使徒經 (アポストロス) 208 端 ガラティヤ書 3 章 23 節~29 節 】

誦經) <sup>けいてい</sup> 兄弟よ、<sup>しん</sup> 信の來らざる <sup>きた</sup> 先には、<sup>さき</sup> 我等 <sup>われら</sup> 律法 <sup>りつぽう</sup> の下に <sup>もと</sup> 護られ、<sup>まも</sup> 閉されて、<sup>とぎ</sup> 信の <sup>しん</sup> 顯 <sup>あらわ</sup> るるを <sup>ま</sup> 俟  
 てり。<sup>かりつぽう</sup> 斯く <sup>われら</sup> 律法 <sup>りつぽう</sup> は我等 <sup>われら</sup> を <sup>みちび</sup> ハリストス <sup>しふ</sup> に <sup>われらしん</sup> 導 <sup>よ</sup> く <sup>ぎ</sup> 師傅 <sup>ため</sup> たりき、<sup>しん</sup> 我等 <sup>しん</sup> 信 <sup>よ</sup> に由りて <sup>ぎ</sup> 義 <sup>ため</sup> とせられん <sup>ため</sup> 爲 <sup>ため</sup> な  
 り。<sup>しん</sup> 信 <sup>きた</sup> の來り <sup>のち</sup> し <sup>われら</sup> 後、<sup>す</sup> 我等 <sup>しふ</sup> は <sup>もと</sup> 已 <sup>あ</sup> に <sup>けだし</sup> 師傅 <sup>なんぢら</sup> の下に <sup>みな</sup> 在らず。<sup>しん</sup> 蓋 <sup>しん</sup> 爾 <sup>しん</sup> 等 <sup>しん</sup> 皆 <sup>しん</sup> ハリストス <sup>しん</sup> イイス <sup>しん</sup> ス <sup>しん</sup> を <sup>しん</sup> 信

ずるに由りて神の子なり。爾等皆ハリストスに於て洗を受けし者はハリストスを衣たり。既に  
 にイウデヤ人もエルリン人もなく、奴隷も自主もなく、男性も女性もなし、蓋爾等皆  
 ハリストス イイスに在りて一なり。若し爾等ハリストスに屬せば、則アヴラアムの裔  
 たり、且許約に由りて嗣子たるなり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟よ、信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視されており、やがて啓  
 示される信仰の時まで閉じ込められていた。このようにして律法は、信仰によって義とされるために、  
 わたしたちをキリストに連れて行く養育掛となったのである。しかし、いったん信仰が現れた以上、わ  
 たしたちは、もはや養育掛のもとにはいない。あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によっ  
 て、神の子なのである。キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。  
 もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリス  
 ト・イエスにあって一つだからである。もしキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子  
 孫であり、約束による相続人なのである。

\*\*\*\*\*

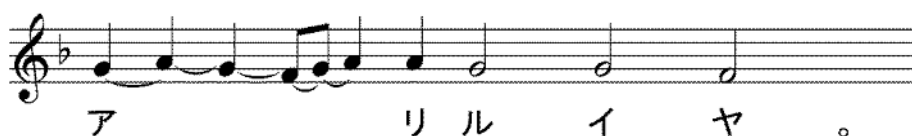
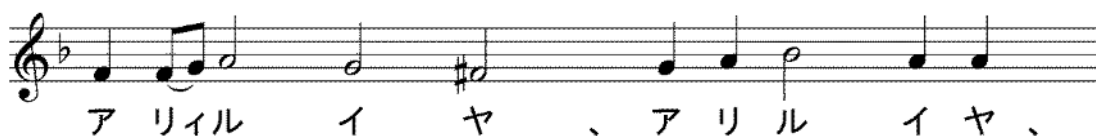
【 アリルイヤ 主日第1調 】

司祭) 爾に平安、

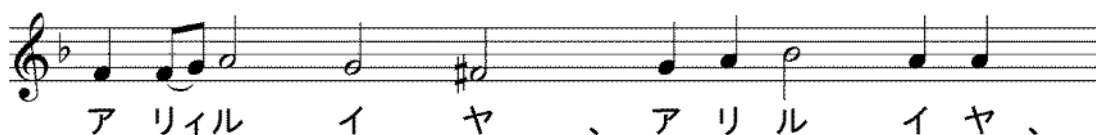
誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) 願わくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讃頌せられん、



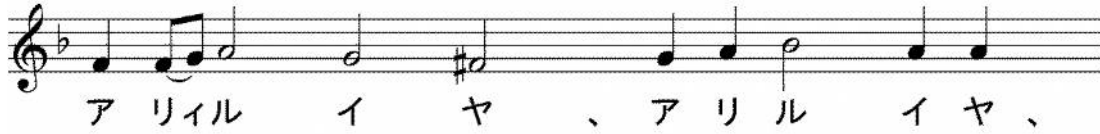




ア リ ル イ ヤ 。

誦經) <sup>おお</sup>大なる <sup>すく</sup>救を <sup>おう</sup>王に <sup>ほどこ</sup>施し、 <sup>あわれ</sup>憐を <sup>なんぢ</sup>爾の <sup>あぶら</sup>膏 <sup>もの</sup>つけられし者 <sup>およ</sup>ダヴィド <sup>そのすえ</sup>及び <sup>よよ</sup>其裔に <sup>よよ</sup>世々に

<sup>た</sup>垂るる者よ、 <sup>もの</sup>我 <sup>われ</sup>爾 <sup>なんぢ</sup>の名に <sup>な</sup>歌 <sup>うた</sup>わん、



ア リ イ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、



ア リ ル イ ヤ 。

司祭) ( 黙誦: <sup>ひと</sup>人を <sup>あい</sup>愛する <sup>しゅさい</sup>主宰よ、 <sup>わ</sup>我が <sup>こころ</sup>心に <sup>かみ</sup>神を知る <sup>し</sup>智慧の <sup>ちえ</sup>浄 <sup>いさぎよ</sup>き <sup>ひかり</sup>光を <sup>かがや</sup>輝かし、 <sup>わ</sup>我が <sup>しねん</sup>思念

<sup>め</sup>の目を <sup>ひら</sup>啓きて、 <sup>なんぢ</sup>爾が <sup>ふくいん</sup>福音の <sup>おしえ</sup>教を <sup>さと</sup>悟らしめ <sup>たま</sup>給え、 <sup>わ</sup>我が <sup>うち</sup>衷に <sup>なんぢ</sup>爾の <sup>ふく</sup>福たる <sup>いましめ</sup>誠を

<sup>おそ</sup>畏るる <sup>おそれ</sup>畏をも <sup>い</sup>入れて、 <sup>われら</sup>我等が <sup>ことごと</sup>悉 <sup>にくたい</sup>くの肉體の <sup>よく</sup>慾を <sup>ふ</sup>踏み、 <sup>およ</sup>凡 <sup>なんぢ</sup>そ <sup>よろこ</sup>爾の喜ぶ <sup>ところ</sup>所

<sup>おも</sup>を <sup>か</sup>思い <sup>おこな</sup>且つ <sup>ぞくしん</sup>行 <sup>せいかつ</sup>いて、 <sup>す</sup>屬 <sup>いた</sup>神の <sup>たま</sup>生活を <sup>けだし</sup>過ぐるを <sup>かみ</sup>致させ <sup>かみ</sup>給え、 <sup>かみ</sup>蓋 <sup>かみ</sup>ハリス <sup>かみ</sup>トス <sup>かみ</sup>神よ、

<sup>なんぢ</sup>爾 <sup>わ</sup>は <sup>たましい</sup>我が <sup>からだ</sup>靈 <sup>こうしょう</sup>と <sup>われら</sup>體 <sup>なんぢ</sup>との <sup>むげん</sup>光 <sup>ちち</sup>照 <sup>しせいしぜん</sup>なり、 <sup>しせいしぜん</sup>我等 <sup>しせいしぜん</sup>爾 <sup>しせいしぜん</sup>と <sup>しせいしぜん</sup>爾 <sup>しせいしぜん</sup>の <sup>しせいしぜん</sup>無 <sup>しせいしぜん</sup>原 <sup>しせいしぜん</sup>の <sup>しせいしぜん</sup>父 <sup>しせいしぜん</sup>と <sup>しせいしぜん</sup>至 <sup>しせいしぜん</sup>聖 <sup>しせいしぜん</sup>至 <sup>しせいしぜん</sup>善 <sup>しせいしぜん</sup>に <sup>しせいしぜん</sup>し

<sup>いのち</sup>て <sup>ほどこ</sup>生命 <sup>なんぢ</sup>を <sup>しん</sup>施 <sup>こうえい</sup>す <sup>けん</sup>爾 <sup>いま</sup>の <sup>いつ</sup>神 <sup>よよ</sup>と <sup>よよ</sup>に <sup>よよ</sup>光 <sup>よよ</sup>榮 <sup>よよ</sup>を <sup>よよ</sup>獻 <sup>よよ</sup>ず、 <sup>よよ</sup>今 <sup>よよ</sup>も <sup>よよ</sup>何 <sup>よよ</sup>時 <sup>よよ</sup>も <sup>よよ</sup>世 <sup>よよ</sup>に <sup>よよ</sup>、 <sup>よよ</sup>ア <sup>よよ</sup>ミ <sup>よよ</sup>ン。 )

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書47 端 10 章32~45 節 】

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、 <sup>つつし</sup>肅 <sup>た</sup>みて <sup>せいふくいんけい</sup>立 <sup>き</sup>て <sup>しゅうじん</sup>聖 <sup>へいあん</sup>福 <sup>へいあん</sup>音 <sup>へいあん</sup>經 <sup>へいあん</sup>を <sup>へいあん</sup>聽 <sup>へいあん</sup>く <sup>へいあん</sup>べ <sup>へいあん</sup>し、 <sup>へいあん</sup>衆 <sup>へいあん</sup>人 <sup>へいあん</sup>に <sup>へいあん</sup>平 <sup>へいあん</sup>安 <sup>へいあん</sup>、



なんぢの し んにも 。

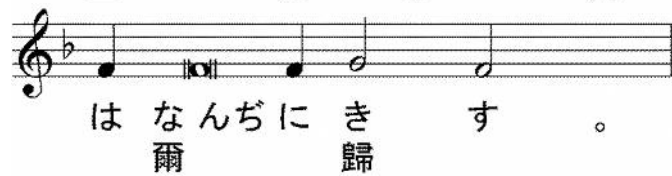
爾 神

司祭) <sup>でん</sup>マルコ <sup>せいふくいんけい</sup>傳 <sup>よみ</sup>の <sup>よみ</sup>聖 <sup>よみ</sup>福 <sup>よみ</sup>音 <sup>よみ</sup>經 <sup>よみ</sup>の <sup>よみ</sup>讀 <sup>よみ</sup>、



しゅよ、 こう え い は なんぢに き し、 こう え い

主 光 榮 爾 歸 光 榮



は なんぢに き す 。

爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイス、十二徒を召して、己に及ばんとする事を語げて曰  
 えり、視よ、我等イエエルサリムに上る、人の子は司祭諸長及び學士等に付されん、彼等  
 之を死に定め、之を異邦人に付し、之を辱め、之を鞭ち、之を唾し、之を殺さ  
 ん、而して彼第三日に復活せん。時にゼウエデイの子アコフ及びイオアン彼に就きて  
 曰く、師よ、我等の求むる所、願わくは爾我等の爲に之を行え。彼は之に謂えり、  
 我が爾等の爲に何を行わんことを欲するか。彼曰えり、我等爾が光榮の中に於て、  
 一人は爾の右に、一人は爾の左に坐せんことを賜え。イイス彼等に謂えり、爾等の  
 求むる所を知らず。爾等我が飲む爵を飲むことを能するか、我が受くる洗を受くるこ  
 とを能するか。彼等曰えり、能す。イイス彼等に謂えり、爾等は我が飲む爵を飲み、我  
 が受くる洗を受けん。然れども我が右及び我が左に坐することは、我が與うべきに非ず、  
 乃備えられたる者に與えられん。十門徒之を聞きて、アコフ及びイオアンを燻れ  
 り。イイス彼等を召して曰く、諸民の稱して王侯と爲す者其民を主り、大人等  
 其上に權を執るは、爾等の知る所なり、唯爾等の中には斯くある可からず、乃爾  
 等の中に大ならんと欲する者は、爾等の役者と爲る可し、爾等の中に首たらんと  
 欲する者は、衆人の僕と爲るべし。蓋人の子の來りしも、人を役わん爲に非ず、  
 乃人に役われ、且己の生命を與えて、衆くの者の贖を爲さん爲なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りは  
 じめられた、「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの  
 手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。また彼  
 をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるで  
 であろう」。さて、ゼベダイの子のヤコフとヨハネとがイエスのもとにきて言った、「先生、わたし  
 たちがお頼みすることは、なんでもかなえてくださるようお願いします」。イエスは彼らに「何  
 をしてほしいと、願うのか」と言われた。すると彼らは言った、「栄光をお受けになるとき、ひと  
 りをあなたの右に、ひとりを左にすわるようにしてください」。イエスは言われた、「あなたがた  
 は自分が何を求めているのか、わかっていない。あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが  
 受けるバプテスマを受けることができるか」。彼らは「できます」と答えた。するとイエスは言わ  
 れた、「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けるであろう。し

かし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、ただ備えられている人々だけに許されることである」。十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネとのことで憤慨し出した。そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた、「あなたがたの知っているとおりに、異邦人の支配者と見られている人々は、その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばならない。人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」。

\*\*\*\*\*

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書 33 端 7 章 36～50 節 】

司祭) 彼の時 <sup>か</sup> <sup>とき</sup> <sup>ら</sup> <sup>いちにん</sup> <sup>とも</sup> <sup>しよく</sup> <sup>こ</sup> <sup>かれ</sup> <sup>いえ</sup> <sup>せきざ</sup> <sup>とき</sup> <sup>そのまち</sup> <sup>おんな</sup> <sup>つみ</sup> <sup>もの</sup> <sup>かれ</sup> <sup>いえ</sup> <sup>せきざ</sup> <sup>し</sup> <sup>においあぶら</sup> <sup>も</sup> <sup>ぎよく</sup> <sup>うつわ</sup> <sup>たづさ</sup> <sup>きた</sup> <sup>そのうしろ</sup> <sup>あし</sup> <sup>もと</sup> <sup>た</sup> <sup>な</sup> <sup>なみだ</sup> <sup>もつ</sup> <sup>そのあし</sup> <sup>うるお</sup> <sup>おのれ</sup> <sup>こうべ</sup> <sup>け</sup> <sup>もつ</sup> <sup>これ</sup> <sup>のご</sup> <sup>そのあし</sup> <sup>せつぶん</sup> <sup>これ</sup> <sup>においあぶら</sup> <sup>ぬ</sup> <sup>かれ</sup> <sup>まね</sup> <sup>これ</sup> <sup>み</sup> <sup>おのれ</sup> <sup>うち</sup> <sup>い</sup> <sup>こ</sup> <sup>ひとも</sup> <sup>よげんしゃ</sup> <sup>かれ</sup> <sup>さわ</sup> <sup>もの</sup> <sup>だれ</sup> <sup>いか</sup> <sup>おんな</sup> <sup>し</sup> <sup>けだしこ</sup> <sup>ざいちよ</sup> <sup>かれ</sup> <sup>こた</sup> <sup>い</sup> <sup>われなんぢ</sup> <sup>い</sup> <sup>こと</sup> <sup>かれいわ</sup> <sup>し</sup> <sup>これ</sup> <sup>い</sup> <sup>い</sup> <sup>あるかしぬし</sup> <sup>ふたり</sup> <sup>ふさいしゃ</sup> <sup>ひとり</sup> <sup>ぎんごひやくまい</sup> <sup>ひとり</sup> <sup>ごじゅうまい</sup> <sup>お</sup> <sup>そのつくの</sup> <sup>あた</sup> <sup>よ</sup> <sup>かれ</sup> <sup>ふたり</sup> <sup>ゆる</sup> <sup>しか</sup> <sup>ふたり</sup> <sup>うちかれ</sup> <sup>あい</sup> <sup>いづれ</sup> <sup>おお</sup> <sup>こころみ</sup> <sup>い</sup> <sup>こた</sup> <sup>い</sup> <sup>おも</sup> <sup>おお</sup> <sup>ゆる</sup> <sup>もの</sup> <sup>かれ</sup> <sup>これ</sup> <sup>い</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>はか</sup> <sup>ただ</sup> <sup>ここ</sup> <sup>おい</sup> <sup>おんな</sup> <sup>かえり</sup> <sup>い</sup> <sup>なんぢこ</sup> <sup>おんな</sup> <sup>み</sup> <sup>われ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>いえ</sup> <sup>い</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>わ</sup> <sup>あし</sup> <sup>ため</sup> <sup>みづ</sup> <sup>あた</sup> <sup>しか</sup> <sup>かれ</sup> <sup>なみだ</sup> <sup>もつ</sup> <sup>わ</sup> <sup>あし</sup> <sup>うるお</sup> <sup>こうべ</sup> <sup>け</sup> <sup>もつ</sup> <sup>これ</sup> <sup>のご</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>われ</sup> <sup>せつぶん</sup> <sup>しか</sup> <sup>かれ</sup> <sup>わ</sup> <sup>ここ</sup> <sup>い</sup> <sup>とき</sup> <sup>わ</sup> <sup>あし</sup> <sup>せつぶん</sup> <sup>や</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>わ</sup> <sup>こうべ</sup> <sup>あぶら</sup> <sup>ぬ</sup> <sup>しか</sup> <sup>かれ</sup> <sup>においあぶら</sup> <sup>わ</sup> <sup>あし</sup> <sup>ぬ</sup> <sup>こ</sup> <sup>ゆえ</sup> <sup>われなんぢ</sup> <sup>つ</sup> <sup>かれ</sup> <sup>おお</sup> <sup>つみ</sup> <sup>ゆる</sup> <sup>けだしかれ</sup> <sup>おお</sup> <sup>あい</sup> <sup>しか</sup> <sup>すくな</sup> <sup>ゆる</sup> <sup>もの</sup> <sup>すくな</sup> <sup>あい</sup> <sup>すなわち</sup> <sup>おんな</sup> <sup>い</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>く</sup> <sup>愛せり</sup> <sup>然れども</sup> <sup>少く</sup> <sup>赦さるる</sup> <sup>者は</sup> <sup>少く</sup> <sup>愛する</sup> <sup>なり</sup> <sup>乃</sup> <sup>婦</sup> <sup>に</sup> <sup>謂</sup> <sup>えり</sup> <sup>爾</sup> <sup>の</sup>

つみ ゆる かれ とも せきざ ものおのれ うち い こ なんびと つみ ゆる かれ  
 罪は赦さる。彼と共に席坐せる者 己の中に言えり、此れ何人にして罪をも赦すか。彼  
 おんな い なんぢ しん なんぢ すく あんぜん ゆ  
 婦に謂えり、爾の信は爾を救えり、安然として往け。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) あるパリサイ人がイエスに、食事を共にしたいと申し出たので、そのパリサイ人の家にはいって食卓に着かれた。するとそのとき、その町で罪の女であったものが、パリサイ人の家で食卓に着いておられることを聞いて、香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、泣きながら、イエスのうしろでその足もとに寄り、まず涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、香油を塗った。イエスを招いたパリサイ人がそれを見て、心の中で言った、「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女がだれだか、どんな女かわかるはずだ。それは罪の女なのだから」。そこでイエスは彼にむかって言われた、「シモン、あなたに言うことがある」。彼は「先生、おっしゃってください」と言った。イエスが言われた、「ある金貸しに金をかりた人がふたりいたが、ひとりには五百デナリ、もうひとりには五十デナリを借りていた。ところが、返すことができなかったので、彼はふたり共ゆるしてやった。このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛するだろうか」。シモンが答えて言った、「多くゆるしてもらったほうだと思います」。イエスが言われた、「あなたの判断は正しい」。それから女の方に振り向いて、シモンに言われた、「この女を見ないか。わたしがあなたの家にはいってきた時に、あなたは足を洗う水をくれなかった。ところが、この女は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でふいてくれた。あなたはわたしに接吻をしてくれなかったが、彼女はわたしが家にはいった時から、わたしの足に接吻をしてやまなかった。あなたはわたしの頭に油を塗ってくれなかったが、彼女はわたしの足に香油を塗ってくれた。それであなたに言うが、この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない」。そして女に、「あなたの罪はゆるされた」と言われた。すると同席の者たちが心の中で言いはじめた、「罪をゆるすことさえするこの人は、いったい、何者だろう」。しかし、イエスは女にむかって言われた、「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 光 榮  
 はなんぢにきす。  
 爾 歸

※聖体礼儀③ へ